
悪鬼夜行

灰色一道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪鬼夜行

【Nコード】

N5017L

【作者名】

灰色一道

【あらすじ】

『悪鬼と巫女が恋をした』なんて昔話が存在する緋上町を舞台に、いろんな秘密を持った居候高校生の深季十夜が、悪霊や妖怪といった怪異と戦うというそんなお話。

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。この中に登場する地名、人物、組織名は現実には存在しません。

ブローグ

ブローグ

普通の人ならば夜の病院と聞いただけで、少なからず恐怖を感じると思う。それが心霊スポットに指定された場所なら尚更だろう。そう思うのだが…

「そういうことに耐性ついてそうなお前がなんでビビってんの？」
そう言つて、さっきから俺のコートを握りしめて放さない少女に問いかける。

腰まで伸びた黒髪のを先を白いリボンでまとめた、巫女装束を身にまとった少女は今にも涙が零れ落ちそうな瞳でこちらを見上げて言う。
「それは偏見だよ十夜さん。神社に住んでるからってね、お化けが怖くないってわけじゃないんだよ！」

「さいですか… っていうか、この時のために鍛えてやったのに…」
ニヤリつと意地悪そうな顔で少女、終つばみを見下ろし。

「帰ったら練習メニューを考え直さないと、つばみ」

更なる練習内容を思い浮かべたのであろう、ガタガタブルブルと震えながらようやくコートから手を離してくれた。

「一応、これはお前のテストを兼ねた悪霊退治だから、安心しろやバくなったら助けてやるから」

「はい、お願いします…」

「はいよ、じゃあ…」

その場で立ち止まり構えを取って、前方から悪意をチラつかせる悪霊が十数体いることを確認し。

「相手方も準備万端だから、さっさと始めますか」

その言葉と共に戦闘を開始した。

基本的に、霊体に対して格闘戦など愚の骨頂なんて言われている。確かにそうだ、当たりもしない相手に格闘戦を挑んで何が楽しいの

か。

じゃあ、どうするのかって？ 答えは簡単だ。

横目で、つばみの姿を確認すると言いつけ通り霊力を拳に集中させ、悪霊の頬に打ち込んでいた。すると悪霊の顔が少しばかり崩れトドメとばかりに振りぬかれたハイキックで粉碎し、頭という命令系統を失った悪霊の体はその場で霧散した。

つまり、似たような性質を持つ霊力ないし魔力などを身体や武器に纏わせることにより、相手が霊体だとしてもダメージを与え、葬り去ることを可能にしているのだ。

それって酷くない？ なんて思われるだろう。まあ普通の霊だったらちゃんとした形式であの世に送ってあげられるが…悪霊に落ちた奴は、そう簡単に成仏してはくれないし、ほっといたら生者に被害を被る。だったら、もう力尽くでいったほうが早い。

といってもこの方法はその場しのぎにしかならず、霧散した力がもとの一つに戻れば、また悪さを働く。ならどうするか。それは後日改まって、弱った悪霊を儀式であの世に送ってあげるのだ。つまり今回の悪霊退治とは儀式の邪魔にならないように弱らせることを目的としているのである。

「そういう訳だから、さっさと大人しくなつて…っろ」

こちらに向かつてきた悪霊二体のうち一体をハイキックの一振りで頭蓋を蹴散らし、その背後から俺に抱きつこうと接近していたもう一体の悪霊の両腕から逃げるべくその場に屈み。

「男に抱きつかれる趣味は無いっつうの」

怒りの鉄拳ならぬ怒りの左掌打で悪霊のクロスされた両腕を弾き、その上にあつた残念がつたる顔面を打ち抜いた。

霧散する二体の悪霊を横目につばみが無事か危険か確認すると、さつきまで泣きそうにしていた表情が一変し、戦いに集中しきつた真剣な表情で次々と悪霊を無力化していた。

まあ、合格点といったところだろう。ちゃんと相手の動きも見れている様だし、俺が教えた武術『深季流』の型や基本戦術も守れてい

る。

なら、これ以上テストを続ける意味はないだろう。

まず周りを見渡し、自分に近い悪霊計六体の姿と位置を確認する。次に最速で勝負がつく筋道を立て、それに適した型をとる。腰を落とし、右手の指を地面につき左手をやや上げた状態に。

「深季十夜。…参る」

その一言と同時に駆け出し、一番近くに居た悪霊の顔面を左手でつかみ取ると勢いのままに投擲。柱付近にいた悪霊に衝突したのと同じに、勢いを殺さず繰り出した右足の回し蹴りで重なった二つ心臓部に打ち抜き、打ち抜いた先にあった柱を蹴って、悪霊の霧散する姿を確認もせず再度疾走。

次の標的にしていた四体の姿を確認し、まずはバク宙からの踵落として一体の悪霊を頭から真つ二つにし、着地から上体を上げると同時に右手の手刀で心臓を貫く。そこから霧散する霊体を右に切り裂いて、すぐそばまで接近していた悪霊の首を切断。俺の背後をとった最後の一体に左の裏拳を顔面に入れて、動きを鈍らせ、振り向きざまにひねりを入れて多少の回転が加わった右の掌打を悪霊の顔面を打ち付けた。

さて、つばみはどうなっているかと霧散する悪霊の向こう側を覗き込むと、俺も先ほど使ったバク宙からの踵落とし深季流『飛鉈』で最後の一体を倒し終えたところだった。

「こらっ」

とりあえず悪霊退治が終わったことを確認した俺は、つばみに近づくとその頭を小突いた。

「痛い…」

「痛い…じゃない。最後のお前が使った『飛鉈』について、俺はただ使用許可を出してなかったはずだが？」

ああいう大技は、ある程度の練度と基本的な型との連携が出来なければ大怪我につながる。だから、練習以外では使うなと教えていた。

「…ごめんなさい」

「素直に謝ればよし。まあ、それはもうこれでいいとして…よく一人でも頑張れたな」

俺が予想したよりも多くの悪霊を倒したつばみに褒美とばかりに頭を撫で回す。まあ今回は基本的に動きが緩慢な悪霊が相手だったということもあったんだが、弟子の頑張りに正直嬉しかった。

「ちょ、ちよつと十夜さん、恥ずかしいってば」

「ハハハハ、俺は嬉しいがな」

そうやってわしゃわしゃ頭を撫でていた俺は少々気が緩んでいたようだ、認めよう。

雑魚とはいえ、いつもは多くて二、三体しかうろついていない悪霊が、今回に限って十数体もいた異常について考えるべきだった。

「面白い技を使うな人間…」

知らず知らず額から頬を伝って一条の汗が床に落ちた。つばみの顔を覗き込むと恐怖で青ざめていた。

それもそうだろう、悪霊ならまだしもこんな化け物に人間が会ったら大概こういう反応を示す。

「おいおい、上位の妖怪がここいらをうろついてるなんて聞いてねえぞ」

床まで届きそうな長い白髪、闇の中で爛爛と輝く金色の瞳、豊満な身体を銀色の刺繍が入った白い着物で包んだ妙齡の女性が、いや悪霊とは比べられない妖怪と呼べる化け物が俺たちが立っている地点より少し離れた場所に立っていた。どうやら悪霊たちはこいつの妖気にあてられてやってきたようだ。

「まあ、そう構えるでない。我の此処での用事は終わったのでな、帰ろうとしていたところで面白い技を使うお主らを見かけたのなこうして暇つぶしに声をかけたのじゃ。話が終わればさっさと立ち去ろう」

「そいつは助かる。助かるんだが…」

此処はある意味大事な場所だ。もし、俺が思った通りなら…。

「その終わった『用事』の内容次第じゃ只じゃ帰すことは出来かねんな」

「ああ」

俺の言葉を理解したのか、目の前の化け物は半月形に口元を歪めて。

「貴様は此処の封印の関係者が…」

その一言で確信した。こいつあの封印を破壊したのか!?

「つばみ、お前は下がってろ」

返事を待たず先ほどの戦いと同様の構えをとつたと同時に走り出した。

今の自分が出せる最速のスピードで間合いを駆け抜け、やつの足元から全ての勢いを乗せた右手刀の突きを繰り出した。

大抵の相手なら見ることも出来ない音速の貫手。狙うは首。

しかし、その一撃は寸前のところで白刃取りされてしまった。

「惜しいな、その身がもう少し人間離れしていたら届いていたかもしれんが…」

「そうだな、もしそうだったらあんたの顔を吹き飛ばしていたらどうかな」

「くくく…あははははは…」

化け物は笑い声を上げながら、俺の右手を放し。

「今宵はさらばだ小僧。またあったときは、その言葉通りのことを期待しているぞ」

そう言い残して、此処から立ち去ろうとする。

「俺は深季十夜だ。あんたは？」

「白姫」

ふわりと奴の腰辺りから現れる尻尾。その数九つ。

「九尾の白姫じゃ」

名乗りを上げたと同時にその姿は闇に掻き消えた。

「白面金毛九尾ってやつか…。ヤバいのがこの町に入り込んだな、

これは「
嫌気がさしてくる相手に頭痛を覚え、その日はつばみと共に帰路に
着いた。

プロローグ（後書き）

後半いろいろ修正が必要にあゝ。

第一話 悪鬼と巫女（前書き）

現在、考えをまとめ中。

第一話 悪鬼と巫女

第一話 悪鬼と巫女

十夜の過去に関わってくる転校生が現れる。その名は緋上紅枝。

その放課後、転校生緋上紅枝は、十夜の正体に気付き襲いかかる。が、学校でそんな事を平然とするな、常識を考えると十夜に言いくるめられ剣をひく。

これから大変だと肩を落として居候している神社に帰り着いた十夜は、己の考えが浅はかだったこと気付く。それは、転校生がどこに引越してくるか考えれば、すぐに分かることだった。緋上紅枝は、緋上神社にやっかいになるなんて、どんな馬鹿でも分かりそうだからだ。

そうしたこともあり、紅枝を新しく加えて現在行っている悪霊退治の会議を行うことになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5017/>

悪鬼夜行

2011年10月7日03時48分発行